退職のあいさつ

前所長　水元　弘二

退職にあたりまして，紙上にて挨拶の機会を与えて頂きました所員の皆様に，心からお礼を申し上げます。

昭和41年に県に採用され，工業試験場に勤務以来，昭和62年12月に，改編された工業技術センター，工業振興課に，そしてまた工業技術センターに戻り，合わせて37年間勤めさせていただきました。

37年間を振り返ってみますと，様々な思い出が湧いてきます。中でも，第１次オイルショック後に給料が倍近く上がった頃から，各地方の公設試が「工業試験場」から「工業技術センター」に改編したこと平成の改革で，国立試験研究機関の独立法人化，来年は国立大学の独立法人化がされる，この２つの改革が私には大きな思い出です。

私が採用された昭和41年は，県内の焼酎，味噌醤油，漬物，木材や機械・金属等の業界では中小企業庁の企業近代化事業が導入され，工場の団地化，企業の合併・協同化等や製造工程の近代化等がすすみ，高度経済時代へと時代が変わってきました。

当時，私どもは近代化されつつある企業へ出向き，技術相談や依頼試験等の技術支援が主な仕事でした。私は，発酵工業部に配属され，焼酎や味噌醤油工場に行くと，杜氏さんや工場長さんから，物づくりの技術を学ぶ事が多く，むしろ私自身が「塾に通う子供」のようでした。

場長から「町医者のような研究員になれ」と檄をいただいたことが，つい昨今のことのように思い出されます。

昭和55年頃から，工業試験場は工業技術センターに改編され，中小企業庁の地方公設試向け提案公募型の研究開発事業がスタートしました。これを機に，公設試の役割は技術支援中心から研究開発へシフトし，工業技術センターも技術支援と研究開発を両輪とした機能強化が図られてきました。

昭和58年に，地域技術活性化事業に，「アルミのセラミックス化」と「シラスのゼオライト化」の二本立てのテーマで提案して採択されました。事業費は３ヶ年で３億円と，私どもにとっては，あまりの規模の大きさに驚いたことでした。

さらに，２年後には地域システム技術開発事業に焼酎業界を対象にした「食品工業の生産・リサイクル高度化システム技術開発」（事業費５ヶ年５億円）をテーマに提案し採択されました。

これらの大型プロジェクトに，県内企業，鹿児島大学と工業技術センターの産学官連携で取り組み，その成果は，10年後に，焼酎蒸留粕処理や蒸留装置の自動化やセラミックス化の技術となり，今日，活用されてきています。

この大型のプロジェクトは，研究内容・研究テーマや研究体制の先進性が高く評価されました。これは，ひとえに議会と行政，そして地場企業と三位一体となって，取り組んで頂いたことに，心から感謝申し上げたことを鮮明に覚えています。

工業技術センターは改編されてから，昨年12月に15年目を迎えました。今日，昭和のバブル経済は疲弊してきました。平成の改革が本格的に始まり，これから先，科学技術を軸に経済の活性化が唱われてきています。

この時勢に合わせて産業界や大学・国研が変化を求めていく中で，私ども地方公設試においても，地域産業・大学も柔軟に変化に対応する事が，今までにも増して強く求められてきていると思います。

また，財政的に厳しい時代が続くと考えられます。研究開発事業や技術支援事業をいかに効率的に取り組み，県内企業の活性化に貢献する事が大きな課題だと思います。

そのためには，「ユイの心」で産学官が一体となり，科学技術を軸にした経済復興が円滑に進みますことを願っています。

「少しきを足れりとも 知れ満ちぬれば 月もほどなき十六夜の空」と島津日新公の伊呂波歌があります。私は，これから先，この歌は，鹿児島の産業を拓くマインドであると思うこの頃です。

最後に，工業技術センター研究開発推進会議の委員，鹿児島ハイテく研究会，産官学連携にご尽力下さった大学や企業等の方々に感謝するとともに，皆様方の今後のご活躍とご健勝をお祈り申し上げまして，お礼の挨拶とさせていただきます。